



第5回留学生が語る / 留学生と語る会

国際化推進へ向けての可能性 —異文化理解マインドを持った教員を目指して—

JUEN 12

Joetsu University
of Education,
Network

上越教育大学学長特別補佐 臼杵 美由紀

留学生の支援対策 と受け入れ推進

本学では、国際交流推進室組織の中に部会を設置していますが、なかでも「留学生支援部会」は、修学支援・生活支援・日本語支援・連携支援という四つを柱に留学生支援を充実させるための様々な取り組みを積極的に実施してきました。部会の支援のもと、留学生が中心的な役割を担って行ってきた活動のひとつに、「留学生が語る / 留学生と語る会」があります。平成19年8月からこれまで開催されたテーマは、以下のとおりです。

留学生が語る / 留学生と語る会発表テーマ

日時	発表テーマ	発表者
2007年8月1日(水) 13:00~14:30	リトアニアの文化を語る —建国1000年の伝統と現在—	ポロンスカイテ・ユルギタ (リトアニア)
2007年10月31日(水) 13:00~14:30	国と文化アイデンティティ	朴信美(韓国)
2008年2月27日(水) 10:30~12:00	黒龍江省の二重特性 —ゆたかな自然とロシア風建築—	修成中(中国) 鄭偉(中国) 史琳(中国)
2008年5月21日(水) 16:20~17:50	中国の大学と日本の大学の違いを語る —大学生のキャンパスライフ—	曲秀葦(中国)
2008年10月15日(水) 14:40~16:10	プラハの春が物語る自由	郷堀ヨゼフ(チェコ)
2009年1月27日(火) 13:00~14:30	中国の少数民族・若者世代について語る	崔勇鶴(中国) 王凱(中国)



留学生の出身国の紹介や、留学生自身の体験からの発表など、本学学生・教職員対象の会は、いろいろな意味で本学国際化推進に影響を与えています。

また、学園祭には、留学生主催の出店も参加し、毎年、海外の違った料理を紹介し続けてきました。留学生達が協力して提供する各国手作り料理は非常に人気があり、開店直後から長い列ができ、いつも完売してしまいます。

12月には、アジア太平洋地域からの高校生訪問団と本学日本人学生・留学生との交流も行われました。これは、「東アジア青少年大交流計画」プログラム参加者が日

本各地を訪れるのですが、上越地域でも参加者の一部を受け入れており、地域連携として本学でも協力を依頼され、昨年度から訪問団受け入れを行っている

ものです。参加者全員の出身国を合わせると、10カ国以上にもなりましたが、コミュニケーションの手段は、英語でのやりとりでした。アジアにおいてもヨーロッパにおいても、高校生・大学生は英語が使って当たり前前の状況を実感しました。

今年度から新たに、留学生が講師を務める市民向けの中国語講座が開講しました。講師は、留学生が1人で担当するだけでなく、中国各地方から来ている留学生をゲストに招き、講義の他に、出身地の観光情報や習慣・風習などを紹介してもらい受講者との交流を図っています。中国語ばかりでなく、お互いに気づかない習慣やものの考え方などが紹介され、毎回「えーそうなの」といったおどろきの声や笑い声の絶えない楽しい教室となっています。留学生の支援対策だけではなく、こうした留学生側からの積極的な働きかけを本学学生、教職員に向けて、そしてさらに、地域社会へ向けて一層広げていくことが望まれます。

留学生受け入れについては、平成19年度、留学生の受け入れ方針



日本語補講（文法）

を設定し、これまでの見直しと今後の留学生受け入れ推進について検討する方向付けがなされました。これまで、研究生受け入れに日本語能力試験2級以上の日本語レベルを課し、平成1年度から留学生全員を対象とした日本語能力測定試験J-テストを実施してきました。また、留学生の修学支援・日本語支援として、大学院に日本語科目を設置し、国費留学生や研究生を対象とした日本語補講の目的別個別指導を充実させてきました。

本学では、日本人と同様のカリキュラムの中で、留学生受け入れが実施されており、論文活動に支



留学生お花見会 高田公園

障のない日本語力が問われます。そのため、自国で日本語を専攻してきた留学生を受け入れるということが現状となっているわけですが、教育学修士課程との接点をどうするかが課題です。国内の就職を希望する留学生が増える傾向にあることと、海外の就職を考える日本人学生も出てきていることを考えると、今後、海外からの優秀な留学生を獲得するために、そして、異文化理解マインドを持つた教員を目指す日本人学生を増やすために、本学としてどのような魅力を打ち出せるのかが問われています。平成19年度、今後の本学の留学生受け入れシステムを検討するため、有志の教職員が海外訪

間調査を行いました。海外の大学から本学へ留学生を送るためには、どのようなことが本学に求められているのか海外の国々から情報収集した結果をもとに、現在の協定校交流の見直し、そして新たな協定校締結、本学独自の奨学金制度設定、留学生への宿舍確保の維持など、海外にアピールできること、国内大学にモデルとして示すことなど、地方教育大学としての本学国際化推進の可能性を模索していかなければならない時だと思っています。

海外学生派遣・交流事業の取り組み

異文化理解マインドを持った教員を養成するという理念のもと、学部学生については、昭和58年度から「海外教育研究」として、大学院学生については昭和63年度から「海外教育特別研究」として、その国の教育の実情や生活文化に

直接触れ、異文化・異民族に対する理解を深めるとともに、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図る目的で、学生の海外派遣プログラムが実施されています。平成18年度から、「海外教育（特別）研究A・B・C」の授業として、韓国、アメリカ、オーストラリアで定期的な学生派遣の形を取るようになりました。この授業は、一年間のプログラムとして設定されており、経験も年齢も異なる大学院生と学部生の協力体制で授業を準備するという基本概念は、本学のカリキュラムの特徴として位置づけられています。特に、韓国のプログラムは、ホーム・ステイや、韓国学生受け入れに協力した本学学生達を中心に、受け入れの翌年、韓国で研修を行うという学生同士の関係の構築、そして、さらには、受け入れ・派遣を通じての引率教員・職員同士のつながりに寄与しています。オーストラリアの受け入れは、アデレードのウェストミンスター・スクールで

すが、本学の学生派遣に加え、平成20年度、本学附属小学校児童が派遣され、これをきっかけにウェストミンスター・スクールの初等部との相互交流、協定締結に発展する見通しです。将来的には、やはり、韓国と同様、隔年で派遣と受け入れを相互に行う計画で、上越教育大学のオーストラリアへの派遣学生、引率教員、そして、附属小学校教職員の協力のもと、国際交流推進室を中心に、上越へのウェストミンスター・スクール受け入れ体制を整え、充実した交流



海外教育（特別）研究Bの授業実践（アメリカ）

活動として展開していくことが期待されます。これらのプログラムのように、海外交流事業として双方の児童生徒や大学生、学校教職員や大学教員を巻き込み、学校現場の授業を中心に実施されるというのは、本学独自のものです。

平成19年度には、大学院新科目「海外フィールド・スタディ」が立ち上がりました。「海外フィールド・スタディ」の開講は、「海外教育（特別）研究」の参加学生から、語学力強化のための研修、



ウェストミンスター校生徒歓迎会（附属小学校）



り上げることもな
ど、他大学には
ないユニークな
プログラムです。
現在は、オース
トラリアのみで
の実施ですが、
他の協定校でも、
国際ボランティア
アの派遣や教育
実習としての本
学学生派遣を要

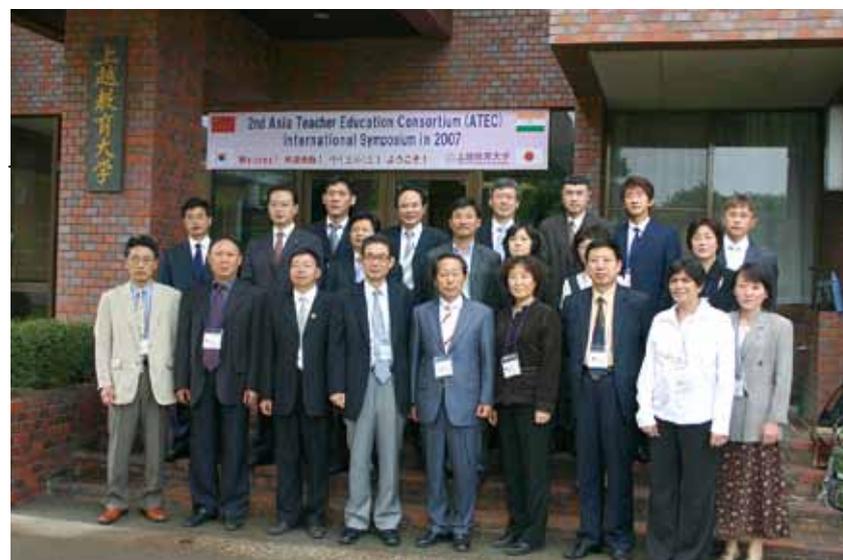


海外学校現場における長期的実
習、ホーム・ステイによる滞在と
いう要望が出ており、その要望を
満たすプログラムの実現が検討さ
れた結果です。実習先は、オース
トラリアのウーロンゴン地域にあ
る小学校から高校で、1ヶ月間の
インターンシップが行われます。
大学院レベルでの実習であり、実
習期間中、ホーム・ス
テイ滞在と現地教員と
同様の勤務体制のもと
で学校生活をおくるこ
と、参加学生の専門分
野や要望、目的に応じ
た個別の受入体制であ
ること、参加学生が学
校現場インターンシッ
プの実践を自立的に作

望する声もあり、今後、本学の海
外学生派遣を活性化させる上で、
重要なキーとなる事業だと思いま
す。海外協定交流を推進していく
ためには、留学生受け入れと同時
に本学からの学生派遣について検
討していかねばなりません。
本学の意味で異文化理解マインド
を持った教員育成を実現していく
ために、これらの海外派遣プログ
ラムを充実し、発展していくこと
が本学の使命であると思います。

アジア教師教育コンソー シアム(ATEC)・ シンポジウムの実施

韓国教員大学校と本学とは、学
生交流においても研究交流におい
ても、よい関係を保ってきまし
た。平成18年、韓国教員大学校の
呼びかけで、アジアの12大学学長
らが韓国に集まり、アジア教師教
育コンソーシアムを設立させまし
た。平成19年には、上越教育大
学で国際シンポジウムが開催さ
れ、各国における教師教育の実践
発表、本学授業の見学、附属学校
見学が行われたほか、今後のコン
ソーシアムにおける研究協力等が
話し合われました。シンポジウム
を通じて、本学の留学生が、韓国
語や中国語の通訳ボランティアと
して活躍しました。平成20年に
は、中国、湖南師範大学の主催で
シンポジウムが行われ、ベトナム、
ハノイ教育大学を加えた13大
学の協力体制となり、国際ジャー
ナルの発行を実施することが決め
られました。また、湖南師範大学
附属小学校での非常に進んだ英語
教育も印象的でした。平成21年度
は、インド、デリー
大学でのシンポジウ
ム開催となります。
デリー大学教育学部
では、メンター制度
を取り入れた教師教
育やイギリスの大学
との遠隔教育を実施
しているということ
で、それらの取り組
みのいくつかを紹介
されることでしょ
う。



上越教育大学で開催された2007年度ATEC国際シンポジウム記念写真

学同士のネットワークづくりがあ
ちこちで繰り広げられようとして
います。本学でも、海外の動きに
乗り遅れないよう、今後ますます
情報収集・交換の必要性が増して
いくのではないのでしょうか。個人
レベルの研究交流から大学として
の研究交流へと、国際的通用性を
求め続けることも本学の課題です
が、コンソーシアムによるネット
ワークも、ひとつのそうした機会
となり得るかもしれません。